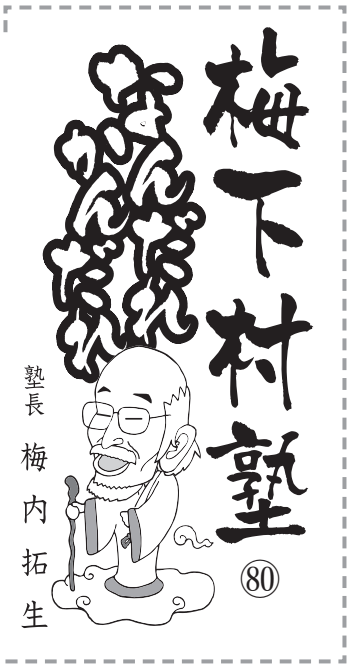
「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



気仙地方文化と21世紀文明(2)

（原子力エネルギー収支）

北朝鮮、イランの核爆弾開発に関するニュースがマスコミを賑わしている。国内では原発の問題をどうするかに関心が高まっている。増加する世界人口とエネルギーの欲求、これらが、原発の必要性と拡大を後押ししている。中国の2・5M粒子を始めとする大気汚染と水質汚染、これらも原発推進に関係している。原発に使用した核廃棄物の有効な処理技術は未だ開発されていない。

これらを地下に十万年もの長間の保管して、放射能をゆっくりと自然へ放出して、廃棄する方法が提案されているが、これも十万年という時間の現実への実感が響いてこない。いわば、原子力エネルギーの収支への現実対応が困難なのである。北欧のように地震が少ない国での可能性の追求は肯けるものもあるが、地震国日本においては、まさにこれは深刻な問題である。

経済活動においても日本国政府には問題が残っている。収支の決算に積み上げられることによって支えられている。しかし、この常識が日本の政府予算の決算には、採用されていない。更に、これへの国民の関心もまだ低いのは大きな問題である。日本の政治統治の「知らしむべからず、由らしむべし」という、歴史的習慣が根強づよく残っているからである。問題は、これら基本的な原子エネルギー収支とその技術が未熟な時に、中国などの大国が大規模な原発計画を進めているのである。

このような世界の情勢に対して、気仙地方からどのようなメッセージを発信すべきか。「急がばまわれ」、気仙地方の歴史をひもどいて、歴史の奥に潜んでいる知恵を掘り出し、それを素材に新しく創り出すことである。これを目指すべきである。

（見覚めつつあるもの）

2月23日の記事に掲載された「新しい公共をかんがえる」はいろいろなメッセージを持っているが、気仙地方から発信できる新しい公共とは何か？東海新報の連載記事にざっと目を向けると、「世迷言」、「気仙坂」、「無我にて候　澤木興道とヤマキさん」、「五葉からの贈り物」、「三陸気仙の地名物語」、「梅下村塾　なんだれかんだれ」がある。

これらの連載記事に込められている根っこのものは地域の歴史と地域文化価値が伝えようとしている「新しい公共を生みだす」エネルギーである。もちろんこのエネルギーは使える形に組み変えてこそ、始めて使うことが出来るのである。これに関しては既に梅下村塾㊾に述べてある。今回は安藤昌益について述べてみる。

安藤昌益は江戸時代に秋田藩大館にうまれ、京都で仏門に入り、医学をおさめ、南部藩八戸で町医者として暮らしていた。インド仏教、中国仏教、儒教、道教の思想を学び、日本の宗教と自然のなかから、「自然真営道」という思想を打ち立てた。

この思想は広汎で深い内容を持っているが、その一部はマルクスの社会思想と共通するものがあり、マルクスの百年前に既にその思想を世に問うていたとして、カナダの外交官で日本の歴史文化を研究したハーバート・ノイマンによって世界に紹介された。

安藤昌益の自然と社会認識の奥には「互性活真」と「直耕」がくみあわさっており、「身体」と「精神」、「労働」と「思索」、の共有と共感の場に「互性活真」が活かされるとしている。深い見識と知恵が伝わってくる。

蝦夷の地である東北が生んだ世界に誇れる大思想家の思想の核芯にある心と魂を、我々はどのように受け継いでいくべきか、気仙の人々は自分のこととして真剣に考えなければならないと思う。気仙地方から「新しい公共」を世界に発信する、またとないチャンスであると思う。

安藤昌益は自分の思想は世の中の根本の在り方に関するものであり、それを性急に直接社会制度改革へつなげると大きな社会のアレルギーを誘発する恐れがあるので、百年もの時間をかけてゆっくりと、教育をするのがいいと述べている。しかし、21世紀の現代社会でも、急を必要とするものと、ゆっくりと進めるべきものがあることも事実である。

（東海新報記事から）

2月22日の「世迷言」は大正時代の作家芥川龍之介の短編小説「蜘蛛の糸」を引き合いに、現代の物性科学技術の発達による、細くて強い糸は宇宙時代に便利性を発揮するだろうという生活の夢の内容を述べている。

要は如何に細くて強い糸でも、それを使う社会と人の心がけ次第であるということだ。人間の心は蜘蛛や人が作った糸などが到底及びもつかないほどのもの（自由とそれを支える倫理）を持っていると言うことである。織物は細い糸できつく織ると水も空気も通りにくい、体にぴったりのものを作ることが出来る。毛糸のような太いもので、手編みで作ると、ふわっとした暖かいものが出来る。細いものと太いものをうまく合わせて創るのがいいのである。細いものと太いものとの組み合わせの「妙」は心が創るのである。

同日の第4面には「投稿　中国に思う　大船渡市日頃市町　黒森　守」の記事がある。中国共産党の「既得権益の我執」と米国資本主義のグローバル経済を舞台とした権益の追求の問題を論じている。まさに、権益の独占に対する問題点を指摘している。中国も米国の政治も経済もエネルギー問題も地球地殻プレート運動による地震と大いに関係してくる。

東日本大震災に対応した経験を整理して、気仙地方から、世界にメッセージを発信すべき時が来ている。